

プロローグ

どこかで聞いたことのあるメロディがなってる。重なるボーカル、伸びやかに高くのびて、歌う。まだ眠いけど、頭の片隅で覚醒しているあたしの一部が歌詞をおいかける。

……君と出会った季節が この胸にあふれてる
きっと今は自由に空も飛べるはず*

ああ、スピッツ。すき。『空も飛べるはず』。なんか iPod の中に適当に入れてたら、よくわかんないけどいつの間にかヘビーローテになってて覚えちゃった。いいよね。

洋楽好きのMはもうスピッツなんて聞かない、となんだか大人ぶった口調で言ってたけど、あたしは好きだなあと思う。かすれた高音がちよっとなんか物憂げなのに、かわいくて、そして厄介なくらい残酷。

矛盾してるむちゃくちゃな感じが同居してて、あたしは聞いてるとなんか「そうだなあ」って思うし、ちょっとじわっと、くる。だって日常そんな感じ。

そこんところMはわかってくれない。オトナとかコドモとか、そのカテゴリ自体になんか、当てはめて満足してる感じが、ちょっと違うと思う。スピッツは、生々しいけど生々しくしたくないのをきれいに歌ってくれてるって、あたしは思うけど。I love you じゃあ、わかんない気持ち悪さとかさ。それでも言われると「空も飛べる」んだろうっていう、突き抜け方とか。

昨日、そんなこと書いてた人の文章、読んだ。『高校生からの社会学』だっけ。あの中にあった。無理やり高校で配られて正直うざかったけど、電車ですることなくて読んだら結構はまった。スピッツとミスチルの違いと何か。面白かったな。自殺の話もちよっとどきとした。人生とか家族とか、日常にあることをひっくり返してみる、当たり前が当たり前に見えなくなる、そんなスリルがあった。

社会学って、そうなのかな……。眠いのはたぶん、その本の感想をブログになんとか夢中で書き込んだから。でもなんだか気分はいいかも。

■ 午前7時、北海道の某所

☞ 彼女が読んだのは『1個人化する社会』。「自分」を見つめることは、社会を見つめること。日常をみつめることは、日常ではないものを見つめること。可能にするのは社会学？

*「空も飛べるはず」
作詞/作曲：草野正宗
JASRAC 出0905155-901



■
午前10時、
都内某所

窓のむこうの空を眺めながら思った。四角い。空は狭い。でも悪くない。

ちらりと視線をうつせば、いつもと変わらぬ教室の風景。黒板の前で語り続けるくたびれたおじさんの声。冷戦、なるほど世界はそう動いてきたのか。そうなのだろう。でもどのへんが動いているのか、その実感はない。先週もこうやって座っていた自分。今朝も「起きなさい」と言う母の声で目を覚まし、携帯を手にした。既にメールが5通。返事を書いたのは2通だけ。変わらない日常、変わらない繰り返し。週末にはNとかRとかの買い物に付き合う。とりあえず池袋芸術劇場前で待ち合わせ。そうやって過ぎていく。

でも本当はそれが「変わらない」ものじゃないことも、わかっている。「変わらない」と思えることは実はけっこうすごいことだということだ。

そんなことを考えるようになったのは、コンビニのバイトで研修生のKさんと会ってからだ。妻子もち、40代、フリーター。冗談かと思ったけど、かなりきついシフトですごくシビアな金銭感覚で、ほかにもいくつかバイトをかけもちしていつも顔色が悪い。最初はなんか、そんな働き方しかできないよっぽどの理由がKさんにあるんじゃないかと思っていた。ありていに言えば、能力がないからそんな状況になってるというか。そもそも、もともとそんなにバイト先の他人に興味なんて持たないほうだった。でも、裏で受験用小論文のレポートを仕上げたとき、つくづくKさんが、本当にうらやましい、という感じでこういった。

「勉強ができるって、いいこと。大学出られるって、いいこと。がんばってください。」

すごく真剣な声だった。そんなことは親にも言われたことがない。Kさんは本当に働き者で、優秀で、店長も頼りきりだ。だけど、もう一人の自称スタジオミュージシャンのSさんとは、ものすごくぶつかる。Sさんは所詮コンビニの仕事、という。その割りに仕事は雑で手を抜くし、どこかコンビニの仕事をバカにしている。自分の本業はそれじゃないって思っている。

スタジオミュージシャンも大変そうだし、好きなことでやってくのは

すごいことだと思う。でも、Kさんのことをバカにするのは、ちょっと違うんじゃないかと、思う。

しかもSさんは、働くことを馬鹿にしないで懸命なKさんのことを、「あいつは……ジンだから」っていう。確かに言葉はもう流暢だけれど、Kさんは……出身だ。でも、だからナニ？ って、思う。

Kさんは「学歴がほしかった」、っていう。Kさんにとってそれは、自分の人生がもっともっといいものであるために必要だった、万能のパスポートみたいだ。

学歴って何だ？ 働くことって、なんだ？ ライフって、そこから決まるのか？ 日銭(というらしい)を稼ぐKさんと「やりたいこと」を続けたいSさんの仕事って、なんかおんなじなのに意味は違うんじゃないのか。

そして何より。こうやって高校で授業を受けて、たぶんそのまま受験をする。それはどんな意味がある？ 考えても仕方がないんじゃないかって思った、塾でも昔そう言い聞かせられた問いが、なんだかまた、気になる。

やわらかい風が外から吹いてきた。ぱらぱらと教科書のページがめくられる。教科書の下に隠した、少し厚いこの本。『高校生のための社会学』。いつも面白くて読んでいるブログにこの本が書いてあった。読んでみても、いいのかもしれない。考えてみても、いいのかもしれない。

黒板の前の先生が、ちょっと今、真摯な人にみえた。くたびれてるのは彼じゃない、俺かも。

☞ 彼が読もうとしているのは、『III 流動化する社会』。目の前にある行為の意味を、データと人のあいだから分析してみる。彼はきっと、社会の基礎にたどりつくはず。それも社会学。



冗談じゃないぞ、と思った。何が？ 何がって、なにゆえ俺の就職時期にきまって不況がくるか。着慣れなかったスーツも、もう慣れた。何度目からの筆記試験からの帰り道、定食屋でYと二人で黙々と、サバの味噌煮定食を食う。携帯の着信に敏感なのは、お互い仕方がない。

「なあ、知ってたか」

何を、と聞くと、Yがぼりぼりと柴漬けを噛みながら、箸でサバを指した。大学の語学授業で一緒だったYとさっき会場で鉢合わせしたときは驚いた。なんとなく、どちらともなく定食屋に流れて今にいたる。

「それ、骨ねえだろ」

■ お昼時、都内某所

言われて見下ろした先に、サバの味噌煮。確かに骨はない。

「つうことは、とってる人間がいるつうことだよな」

そりゃそうだろう。何を当たり前のことを言ってんだ、とYを見返すと、しごくまじめな顔がこちらをみている。

「今日の筆記、どうだった」

どうだったといわれても、まったくできなかった。隣でもくもくしゃらしゃらと書き進めていた連中と違って、俺の手は途中で止まったり、結局何もかけなかったり。うん、とごまかして白飯を口に運ぶ。

「俺さ、起業しようと思って」

え、と思わずYの顔を凝視したら、照れたように笑った。

「地元がさ、もともと三浦半島のさきっぽなんだよ。じいさんとかそのへんみんな、漁業関係者でさ。1年のころとかはそれが結構コンプレックスでさー」

だってうちの大学、都会のど真ん中だし、半分以上都内出身者でこじやれてるしさ。言うの恥ずかしかったんだよ。

「あれ、でもお前、環境系のゼミいなかったか？」

「あ、そうそう。なんか知らんうちに、結局な。」

蛙の子は蛙ってやつかな。そうやってまた笑う。

「なんかなあ、ゼミで活動してたらさ、やっぱうちのじいさんとかすげえじゃん、とか思い始めたんだけど、その割りに、なんつうか、社会的評価って低すぎんじゃねえかと思い始めてさ。ま、かくいう俺が最初はコンプレックスもってたんだから、しょうがねえんだけど」

どうにかならないか、ってゼミの飲み会なんかでクダ巻いてただけだったんだけど、最初は。

「なんつうか、都会のネットワークって結構すごいな。気がついたら知り合いの知り合いにおんなじこと考えてるやつがいる、とか、新潟にこんなことやってる漁師さんが、とか、あっちの広島あたりの活動はお前の言ってたことに近いじゃないのか、とかさ。どんどんなんか、見えないうちに色んなものが集まってきちまって」

コップに手を伸ばして水をぐいと飲んだ。

「なんかなあ、変な話なんだけど、みんなこの社会ってつながってんだよ。人もモノもさ。そしたら大学で今まで受けてた授業がやけに面白くてさ。で、いざ授業で習ったことなぞりながら新聞とか読むと、全部立体的に見えてきて、なんつうか、世の中が面白くてさ」

今日の試験もなんだかんだ言って書けちゃった。さらっと言って、また笑う。

「でもやっぱりな、試験受けてる途中にさ、集まってきた情報とか人材とかネットワークとか、無駄にすることはないし、こんなにすごいって思えることを、素直にじいさんたちにも教えてやりたいし、もっと変な話、くたびれかけてる経済なんかさする、儲かる道もあると思うし。昔の話聞いたり、統計使ったり、なんか授業で習ったこと総動員できそうだし」

そう考えるとなんか、座ってられない気分ができて、試験の半分ぐらい、上の空だった、そうやってまた、Yは笑った。

俺たちはサバ味噌煮定食を食べきって、そこで分かれた。Yは携帯を手に、なにやら話しながら代々木の向こうに消えていった。そして俺は――。

これ、読むと結構、面白いぜ。去り際、そうやって書店の店先でYが指し示した本を、電車の中で手にしている。Yのように笑うことが、俺にも近いうちに、できるだろうか。

☞ Yが経験したことを語っているのは、『II ネットワーク化する社会』。そして彼が今後使っていきそうな、「社会(そして人々の)のニーズや仕組みを捉えるための方法」は、『VI 進化する社会調査』に書いてある。



叫んだ。いっしょに。いつのまにか体が動いて、伸び上がって、手を振り上げて。ものすごく熱いものがぐぐぐっとこみあげてきて、周りのみんなと力の限り。

「Yes, We Can!」

褐色の肩が触れ合って、隣にいたニーナと目があった。泣いていた。うれしいんだ、と思った。これが政治にコミットメントする、ということなのかもしれない、と思った。ヒスパニック系の彼女が新しいこの大統領に傾倒するその熱情が、ちょっと、いやかなり、その肩から移った気がした。

それは去年のこと、アメリカに短期留学したとき、ちょうどあの国は大統領選挙の真っ只中だった。大統領本人の評価はもちろん、期間中になしえた業績から判断されるのだろうけれど、わたしはあの、よくわからないけど熱い記憶が忘れられない。

集会に集っていたアフリカ系アメリカ人の人々、ニーナの家族のように不法滞在からあの国で家族の歴史を始めた人も多い、ヒスパニック系

■ お昼時、関西某所

の人々、先住民の人々、もちろん、わたしたち日本人をはじめとするアジア系移民の人々、あの熱狂。

ニューヨークの片隅の大学構内で、喜び合っていたら、近くのネットカフェから人が飛び出してきた。「DCで行進がはじまってる！」うれしくなってわたしたちも通りを練り歩いた。

金融不況、非白人種 (the coloredっていうんだ!)、国際労働移動、移民労働者、インフォーマルセクター、メルティング・ポット、グローバリゼーション、トランスナショナルっていうこと、デジタル・デモクラシー。そんな言葉が普通にとびかかって「なにがこの社会の問題なのか」って話をしながら、ビール片手にプラカード持って。

なのに、日本に帰ってきてみたら、金融不況とか派遣労働とか、そういうことを正面から言うことも、政治の議論を正面からすることも、民主主義を考えることも、なんだか普通の大学生活からはとてもとても、遠い。うちの家族の日常からも、やっぱり遠い。

どうしてだろうって考えた。メディアの仕組みなのかもしれない？なら知りたいと思った。メディアの力はすごいけど、怖いものでもあることを、大統領選を見てて知ったから。

それに、あのとき友人たちと話した「社会の問題」についての議論も、もっと日本でもしてみたい、しなきゃいけないのになって思った。グローバル化、グローバル化しなきゃっていつているけど、日本社会が「しなきゃ」といつていることって、違う気もする。それについても考えてみたい。恥ずかしいけど、大学生なのにそのことを考えたことはなかった。あの熱狂の経験がなかったら。だからちょっと、読んでみようと思った。大学に帰った日、サークルの後輩が小脇に抱えていたこの本。

大学の近くにある公園で読むのはどうかな。今日は天気がいいし。いい風も、吹いている。

☞ 彼女が読もうとしているのは、『IV メディア化する社会』『V グローバル化する社会』。あなたの中にわきあがる疑問や熱情のゆくえを知っているのも、きっと社会学。



本書にちりばめられた話が、みなさんの日常生活をくるっとめくり、気になっていることをひらいてみせるツールとなることを願って。

福永真弓+「高校生のための社会学」編集委員会